近藤牧場

土地条件と牛に合わせた放牧スタイル　併給で健康な牛づくり

経営概要

所在地	川上郡標茶町
家族構成	本人、妻、従業員２名、パート１名、研修生１名
経営面積	100ha（放牧地 20ha、採草兼用地 15ha、採草地 65ha）
飼養頭数	130 頭（搾乳牛 80 頭、育成牛 50 頭）
飼養形態	フリーストール牛舎
生産乳量（出荷乳量）	700t/年
１頭当たり平均年間乳量	8,000kg
放牧類型	大牧区、昼夜放牧
放牧期間	５月初旬～10 月末
圃場植生	チモシー、白クローバ

放牧の導入

近藤牧場は、現経営主の英實氏の父の代から標茶町オソツベツ地区で放牧酪農を実践してきた。

継承当初は約 30 頭の飼養頭数規模だったが、英實氏の代で丘陵地を切り崩して現在の牛舎を増築。ピーク時には 170 頭を飼養するまでに規模拡大している。

“頼りすぎない”こだわりの放牧スタイル

近藤牧場の特徴は、“牛の求めるものに合わせた放牧スタイル”で放牧を実践していることである。

放牧スタイルは完全昼夜放牧だが、放牧地と牛舎の行き来が自由になっており、例えば真夏の気温が高い時期には、牛が牛舎に戻って来られる様になっている。

自由な状態といっても、粗放な管理をしているというわけではなく、放牧地での採食量が充分でない場合には、牛舎側での飼料併給できちんと栄養状態を補完している。

英實氏曰く、この様な“放牧に頼りすぎない”形態は、個体管理や繁殖管理の上で優位にはたらいており、厳寒期や暑熱期の分娩頭数の低減による分娩事故抑制や、作業負担軽減というかたちで経営におけるメリットとなっている。

英實氏が放牧に感じるメリットは、前述の管理面だけではなく、糞尿処理等の作業省力化や健康な牛づくりにあるという。近藤牧場では脚蹄要因による淘汰は年に１回出るかどうかというレベルで、足腰が丈夫な牛群をつくることができている。

また、放牧草の食い込みが良く、併給できちんと補完しているため、内臓も健康な牛群となっ

ており、分娩１ヶ月前の牛を分娩房で管理し、状態をみながら配合飼料の給与量をコントロールする等、併給管理が徹底されている。分娩介助もほとんど行わず、自然分娩を重視していることで、周産期疾病も少なく、繁殖成績が良いことから、理想的な分娩時期のコントロールが可能となっている。

放牧は、泌乳ステージに合わせて前期群と中後期群の２群に分けて行い、中後期群であっても、泌乳量の低下率が小さい牛は前期群に群分けしている等、ここでも牛が必要な栄養状態に合わせた飼養管理を垣間見ることができる。また、２群を隣り合わせの牧区に放牧すると、牛群の間で闘争が発生してしまうため、離れた牧区に放牧することが大切だという。

取材した年は春先の天候が良く、例年より早くトラクターが放牧地に入ることができる状態だったため、施肥後に放牧を開始したが、放牧草の生育が活発で、頭数に比べて草量が過剰な状態になってしまったとのこと。

直近の草地更新が６年前であり、更新をおこなうべき時期にきているということだが、１年間利用ができない草地になる可能性があるので、慎重な判断が求められる。また、播種時期が早すぎると雑草に負けてしまい、遅すぎると種が雨に流されてしまうため、播種時期は非常に重要だということであった。

近藤牧場の放牧地

放牧風景

放牧酪農を志す新規就農者支援

近藤牧場は広大な丘陵地に隣接しているため、現在の省力的な大牧区放牧が実践できているが、英實氏は必ずしも自分の経営スタイルが正解だとは限らないと話す。

自身も新規就農を志す研修生をコンスタントに受け入れ、町内外への就農者の支援を行ってきた。研修生には、少ない土地面積であっても放牧経営の実践は可能であり、周囲のサポートを受けながら、就農した土地環境に合わせた方法を確立していくことが大切だということを教えたという。

放牧草の品種改良により、以前よりも短い草丈で放牧を開始してもよくなっていることを知らずに放牧管理に失敗する事例もよく聞くそうで、放牧形態で新規就農を希望する若者には、きちんとした知識を習得し、足腰の強い酪農を実践していってほしいと話していた。

取材日：平成 29 年 8 月 10 日

連絡先：釧路農業改良普及センター　　電話：015-485-2514